

ニホンオオカミと判明

米里にも昔、ニホンオオカミが！

宮沢賢治作品に「狼森と策森、盗森」があります。その狼が、米里にも住んでいたのかどうか疑問でした。

しかし、米里字下大内沢の千田佐一さん宅に伝わる獣頭骨の一部が DNA 分析の結果、ニホンオオカミのものと判明しました。和牛を飼育している佐一さんが、



長年懇意にしていた愛宕の獣医師菊池さんの図らいで、岐阜大学石黒直隆教授に鑑定を依頼していただいたお陰とのこと。根付として使われていたということは、山仕事の際のお守りだったのだと思います。米里にもオオカミが本当にいたとはびっくりです。

確かに白山神社の白山堂東斜面には、狼穴(おいのあな)という所があり、山本川の上流や物見山の北側には狼が寝そべった狼岩という平らな岩があります。五輪峠には、オオカミに食べられた一家の話も残っています。また、狼に襲われて亡くなった方を吊った石仏が種山ヶ原の監視小屋のそばに立っています。中屋敷には風習として、1月14日の晩に餅2切と煮干し2匹を、5月4日の晩には白いおにぎりを狼に供えていたと言います。子供たちは、「それを道端に置いたら絶対後ろを見るな」と言われ、道端に置くと「山の旦那さま、あげまーす」と叫んで逃げて帰ってきたと言います。それほど、狼への恐れがあり、その反面畏敬の念もあったのでしょう。中郡地区には、向平当に明治36年に衣川の三峯神社から分霊勧請した三峯山があり、毎年旧暦3月19日に講中から3名の代参人を派遣し、ご祈祷を受け、御神符を拝載して帰りました。そして、その夜講中一同が参集し、直会を開き、御神符の分配と代参人の引継ぎを行なわれるという風習があり、今なお続いています。

<三峯神社はオオカミを神のお使い(眷属)とする火防・盗難除け・悪疫除直会けの守護神としての神社>

狼は神格化され、善人を守り、悪人を罰する神として、また、災害から守る神として祀られています。米里には三峰山が向平当のほかに、太田、上大内沢、中屋敷(お不動さん)、荒谷、下大内沢にあります。

では何故ニホンオオカミは絶滅したのでしょうか？

ニホンオオカミ研究者・中沢智恵子さんの報告によると、絶滅の原因は、イヌの病気に感染したこと、猟銃の発達による鹿などの獲物の減少、山林開発による生息地が狭められたこともあるという。そして、その反動として放牧している牛馬だけでなく、人も襲われるようになって、自治体はオオカミの駆除政策を進めました。捕獲者に報労金を支払う制度を実施し、ニホンオオカミの絶滅に拍車がかかったものと思われます。

岩手県でも、明治6年「牛馬取締規則」が布達され、牛馬がオオカミに食べ

られた時には県に届けるべきことが定められ、明治8年にはオオカミを捕獲した者へ手当金を支給することが布達されました。そして、明治8年は47匹、9年25匹、10年43匹、11年40匹、12年24匹が捕獲され、明治35年頃にはニホンオオカミはその姿を消してしまったようです。この制度も自然に廃止されたようです。玉里でも以前に発見されています。

尚、手当金制度の内容は、

雌 8円 雄 7円 子 2円 +運搬費

※①貨幣価値は、大工の賃金等から換算すると、1円は現在の約5万円だそうです。1万円位だという方もいます。〈検討中〉

②地名としては、狼久保や狼沢、狼森がある。特に、南部藩には多いということです。

③岩手県では、オオカミを方言で、「おいぬ」「おいの」「おいね」「おおいぬ」「おかべ」「おおかめ」「おいす」と呼ばれていたようです。

尚、「オイノ」は「オオイヌ」が訛ったものと言われています。

今後、地域の方々にオオカミに関する情報提供をお願いし、米里とニホンオオカミとの関わりをまとめていきたいと思っています。